

ドールズフロソトライソ

N1N3_81RD

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

万人受けしないギャグとタクティカルなガンファイトを書きま
す。1話完結型、前後の繋がりは基本なく、スッキリサクッと読める
路線で行きたいです。

ガンファイトはゲームの部隊編成を実際の銃撃戦的に考えてどう
立ち回らせてるのかそれなりに考えて書いたりしてるつもりです。
……ゴメン予防線張らせて、結構ノリで書いてるってことにしてくだ
さい。

”リアクション・トウ・コンタクト”は長ったらしいのでしおり機
能を活かすために話を分けてます。

しづにもなげてます。

目次

プロローグと雑な指揮官の成り立ち	1
M1911との安易なイチャつきのようなもの	3
best quickscoper	3
xxxHarutal903	3
xxx	9
リアクション・トウ・コンタクト	17
リアクション・トウ・コンタクト	21
リアクション・トウ・コンタクト	27
リアクション・トウ・コンタクト	36

プロローグと雑な指揮官の成り立ち

” こんだけのレア銃を実戦に放り込むとかどうかしてるぜ”

グリフィン&クルーガー民間軍事会社（正式にはPMSCsと呼ばれるのが正しいが、2062年にその呼び方は定着しなかった）。この会社勤め始めた時、真つ先にそんな感想が口から洩れてしまったことは記憶に新しい。第三次世界大戦までも生き残ったといえど、自分のセンスは黄金時代に縛られていることを実感した。

2030年に、子供の冒険ごっこが原因で起こった第1次北蘭島事件。それは崩壊液と呼ばれる、未知で危険な物質が世界中に拡散したきつかけを意味していた。地球の大部分はそれに汚染され、あらゆる資源が失われていった。

そんな絶望に事欠かない時代に生きる俺たちにとって、娯楽や文化は貴重で、敬愛すべきものだった。新しいものがなかなか生まれなくなっていくこの時代では、黄金時代の文化と流行を再び追いかけることが何よりの生き甲斐だった。

やがて膨れ上がった風船が割れるかのように、とうとうそれは起きる。

” 何が始まるんです?”

長い年月を経て、この問いへの答えが現実になってしまった。

” 第三次大戦だ”、と。それは2045年のことだった。

資源の少ない中起きた奪い合いだ。当然世界大戦も長くは続かなかったが、こんな時でも人間は戦争で技術を存分に育てることができた。

終戦後ボロボロの人間社会を支えたのは、皮肉にも戦争によって生み出された【自律人形】だった。人と見た目は変わらずとも、テクノロジーによって人を超えた性能を持つ者たち。民生用に技術転用して生まれた”彼女”たちは、労働力だけでなく、頼もしい友人とまで呼べる存在となっていた。

だが現実にはさらに過酷な試練を与えた。鉄血公造株式会社にて製

造されている戦闘用の人形にエラーが起き、人類に牙を向いた。ニユースでこれを聞いた時、驚く前に俺は呆れていた。そんな手垢まみれの展開を終戦後にやりやがるのかと。ターミネーター全シリーズ見直してこいと。全作が収められた記憶媒体を送りつけたいところだったが、あいにく鉄血の社員は皆エラースを起こした人形たちネットに殺されてしまった。殺される前にターミネーターを是非見せてあげたかった。

暴走した人形たちは、かつての崩壊液のように各地に被害をもたらしていった。しかし、それから世界を守る盾となったのは、同じ人形たちだった。

【戦術人形】。民生用に普及していた自律人形、そして人間の歩兵武装の到達点たる”銃”。それらをプログラムによって繋ぎ合わせることで生まれた、人類の剣であり盾であり、希望。

三度の大戦を経た先に待ち受けた未来は、人の生んだ技術と技術が争い合うなんとも業の深い世界になってしまった。人は過ちを繰り返す。

そんなデバフにデバフを重ねたような終末間近の2062年。戦術人形を主力として運用するこの会社G&K P M Cにて、俺は一人の指揮官として身を置いていた。

生い立ちはそのなに特殊ではない。北蘭島事件の数年後に日本で生まれ、他の同年代の例に漏れず、黄金時代の様々な文化に囲まれて育ってきた。普通の人間はそういった過去の文化だけでなく、人付き合いや恋愛、セックスや酒なども生き甲斐とする者が多かった。

だがどうやら俺はそういったものとはあまり縁がなかったらしい。それらからすら逃避するように、一層過去の文化、それもかつてサブカルチャーと呼ばれていたカテゴリに傾倒するようになっていた。

映画、ゲーム、音楽、アニメ、漫画、等々…。第三次世界大戦で徴兵される頃には、すっかり一人のオタクが出来上がってしまったのだ。

M1911との安易なイチャつきのようなもの

「しつきかーんさまー！　ただいま戻りましたよー！」

穏やかな鈴の音の音圧を上げたような声と共に、勢いよく自室の扉が開けられた。

「あーいガバちゃんおかえりー」

眺めていたノートPCの画面から、視線を扉の方へと移す。そこにいたのは、肩にかからない金髪をした、十代半ばに見える女の子だった。

白いシャツと白いミニスカート。上からは淫色の半袖ジャケットを羽織っている。豊かな胸元には、星条旗をモチーフにしたネクタイが二つの双丘に挟まれていた。

「もーその呼び方やめてって言ったでしょー？　そろそろホントに怒るよー？」

扉を閉めながら、その少女は口をとがらせて言う。

「わかったわかったごめんて」

「そう思ってるなら行動で示してくださいっ」

こちらへ向き直るなり、彼女はぶいとそっぽを向いてしまった。

「はいはい。おかえりナインティーン、後方支援おつかれ」

ナインティーンイレブン

コルトM1911。だから彼女のことは、愛称としてナインティーンと呼んでいる。俺はガバメントと呼んでいたが、どうも彼女には不評らしくそう呼ぶことは少なくなった。言うても1911Ⅱガバメントという脳内の等式はなかなか崩れないので、ついガバメントと呼んだりもするが。

まあガバちゃんと呼んだのはほぼ悪意だけだな。

「ただいま、ダーリン」

「んんんんん……その呼び方もやめてくれつつたろオ？」

出会ってそう間もないうちから、ナインティーンは俺のことをダーリンと呼んでくる。かわいい子にダーリン呼ばわりされるのは悪い気はしないが、恥ずかしさ等諸々の事情もあってそう呼ぶのはよしてほしい。

ナインティーンは俺の要望を聞きつつ、来客用のソファに座った。

「えーいいじゃないですかあダーリン♡」

「いや普通に恥ずかしいんで……あと一応僕立場上なんでえ」

「そんなお堅いこと言う人じゃないクセに〜」

本音と建前を逆にした上両方とも包み隠さず伝えてみるが、あまり意味はない。

「あーうるさいうるさい」

「だーりーん♡ だーりんだーりんだーりんだーりんだーあーりーん♡」

「リンダリンダうるさいなブルーハーツかお前はア」

「むー、指揮官様にこそ愛の意味を知ってほしいですね」

「そんな脳内の電気信号と化学反応が生む幻じやい」

「わ、女の子前にそんなドライな発言しますう？」

「世の中なんでも幻みたいなのもんやし。だからさつきから終わんねえ部隊の再編成も幻なんや……全部ウソやねんこの世界」

そう言っつて再びノートPCに向き直る。そこにはG&KPMCが保有している戦術人形たちの名と顔写真が表示されていた。社の人形保有数の拡大に伴い、部隊の再編制が必要になっていた。だからこそ、ナインティーンが帰ってくる前から部隊の再編制に頭を悩ませているのだが、意外と思うようには進まなかった。

「何トチ狂ったこと言ってるんですか？ もー……」

ナインティーンのその言葉の後、コツコツと彼女のレーザーブーツの足音が近づいてくる。彼女に限らず、G&KPMCが保有している戦術人形たちはパーソナルスペースを容易に超えてくる。少し距離を詰められる程度なら、意識しない限りはあまり気にならなくなってしまうっていた。

「フアツ!？」

すると不意に、右耳に暖かい風が吹きつけられると同時に、むず痒い快感が全身に広がった。思わず肩が縮こまる。

「これも幻ですか？」

右耳のすぐそばから、ナインティーンの甘く囁くような声が発せられる。どうやら側に来たナインティーンが右耳に息を吹きかけてき

たようだ。

自律人形なんて呼び方をされてはいるが、彼女たちはあらゆる面で人間に近い。”暖かい息を吐ける”ことも、高性能さに拍車をかけている。これじゃまるで人形やアンドロイドというよりレプリカントだ。

「……浮かびかけてた編成が今ので全部吹き飛ばされたぞ」

恥ずかしさをごまかすように言い、肩を縮こまらせたまま彼女の方を睨みつける。

「えへ」

クソツかわいいじゃねーか。

「へッへッへッへ」

ナインティーンの小悪魔スマイルに対抗して小悪党スマイルを浮かべつつ、両手を彼女の両の頬へと持って行き、つまむ。

「む、あ、あ、あ、あ、あ、あ」

そのままぐりぐりとおつまんだ指を動かす。

マリオ64のオープニング画面よろしく好き勝手に動かした後、ぶへっとなんかの頬の内側へ押しつけてフィニッシュ。

「つーか帰ってきたばっかなんだからまず休めよ……」

「そんなに疲れることじゃないもの」

ナインティーンはほっぺを両手で撫でつつこちらをジト目でらみつけている。

「フーンそんなもんなんすか」

「そんなもんなんです」

と、頬を撫でる彼女の手を見てふと気づいたことがあった。

「なあ気になったんだけど、ちょっと銃貸してくれない?」

ハンドガンを使用する戦術人形たちは、その携帯性を十分活かして常に己の得物は携帯している。ナインティーンは任務時二挺持ちトウハンで用いているが、常に持つのは一挺だけだ。

「……? いいですけど」

ナインティーンは慣れた動きで右腰のホルスターから黒いガバメントを引き抜く。マガジンキャッチを親指で押し、左掌にマガジン

を落とす。中指から小指の三本指と、ガバメントのグリップでマガジンを挟み、保持。銃を傾けてスライドを素早く引き、薬室に収まっている一発の45ACP弾を排出。飛び出した弾丸は重力に従い、ナインティーンの左掌に収まった。

(いつ見ても戦術人形たちの銃捌きは惚れ惚れするな……)

戦術人形として、銃に関連する操作やテクニクは一通りインプットされている。それに機械の正確さと素早さが加われれば、十代半ばの見た目をした女の子がプロ顔負けのタクトレムーヴをしている様を見ることが出来る。まあ今の動きはタクトレムーヴとは少し違うものだが、それでも見ていて気持ちのいいことには変わらない。

「はい、どーぞ」

ナインティーンは弾丸とマガジンを胸のポケットにしまう。空撃ちして弾が入ってないことをしつかり確認し終わると、銃身を握り、グリップをこちらへ向けてガバメントを差し出した。

「ん、ありがとう」

手元にあるこの自動拳銃、M1911。通称ガバメント。開発されてから100年、いや150年以上経つたにも関わらず、今こうして実戦に用いられている1挺が手元にある。上位互換のクローンがいくつも開発されているが、この基本のモデルも今なお人気だし、現役だ。

アメリカ人のために作られたこれは、日本人にとっては少し大きい。ましてやナインティーンのような、十代半ばの外見をした女の子にとってはなおの事だ。

ナインティーンの右手を引っ張り寄せ、ガバメントを持たせてみる。手の正中線と、銃の正中線を一直線にさせて握らせようとする。どうしても指は満足な位置にならない。

拳銃の握り方として、”銃と腕の正中線が一直線になるように持つ”というのがある。だが銃と手の大きさが合わないと、そういう持ち方ができないという弊害が起きるのだ。

「し、指揮官様……?」

男が両掌の中で自分の手に銃を握らせているのだ。そらそんな戸

惑いを見せるわな。ちよつと嬉しそうなのがなんか癪だけど。

「ああ、いや。ナインティーンって二挺持ちしてるけど、手の大きさとか問題ないのかなって気になってさ」

ガバメントを机に置くと、今度は自分とナインティーンの右手を重ねて大きさを比較する。やはり実戦に赴く彼女の方が、銃を満足に扱うには少し大きさが心もとなかった。

「なるほど。確かに手の大きさは小さいですけど、特に問題ないですよー。正中線を意識した持ち方をしなくても、戦術人形としてのスベックとプログラムがあればリコイルコントロールも簡単なんです」
♪

「へえーなるほど。謎が解けたわサンキュー」

「いえいえ、ダーリンのためならお安い御用です」

「ハハア……。そんでさあ」

「はい」

「そろそろこの、握った手を離していただけると……」

何気なく手を重ねたのが間違いだっただろうか。そのままナインティーンは俺の指と指の間に自分の指を絡めてきたのだった。さながらそれは、俗に言う恋人繋ぎと酷似している。

「私わたくし、さつきダーリンの謎を解いてあげましたよね？」

”ギブアンドテイクだ。逆らうな”。そんな言葉が脳内で勝手に続いていた。

「GRKR」Xx「COMM4ND3R」xx:f***

「COLT」H4ND「C4NNON1911:deal with
it

「はい、というわけでこっちも」

と、左手を差し出してきた。

ナインティーンに限らず、彼女たち戦術人形はたしかに見た目は可愛い。正直ドキつとする時もあるけど、所詮彼女たちは資源さえあればいくらでも量産可能なロボットだ。

しかし、俺は黄金時代の文化に育てられてきた人間だ。人とロボの友情を描いた作品はたくさんあるし、実際共感や納得できる部分は多

best quickscoper XXXHar
utal903XXx

手にあるA4サイズのタブレットを眺めながら、俺はヘッドセットの位置を直す。

「G3、AKはウージの制圧射撃が始まり次第迂回。左右から敵を挟みこめ」

右手の二本指を並べてタブレットに乗せ、V字に指を広げる。その操作に応じて、画面に表示されている地図が拡大された。拡大された地図の上には、二色に分けられた複数のアイコンが表示されている。

『了解』

『オーケー！』

ヘッドセットからはすぐ、二人の女性の声が帰ってきた。同時に不規則な銃声が耳に入るが、二人の言葉が終わると同時にそれは途切れる。

「M4はその場で援護を続けてくれ」
エムフォー

『了解です』

さらにもう一人、穏やかな女性の声音が耳に入った。

（あとともう勝手に殲滅してくれるかな）

ふつと軽く息を吐いて背もたれに体重を預け、目の前の大きなマルチモニタを眺める。そこでは、複数のアングルや位置から、とある分隊が銃撃戦を繰り広げている様を映していた。

俺は今現在、戦術人形の戦闘訓練の指揮をしていた。とはいえ、それともうそろそろ終わりそうであるが。

PMCといえばピンキリですよねって感じではあるが、グリフィン&クルーガー民間軍事会社は比較的上位に位置するPMCと言えるだろう。戦術人形を多数保有し、支部にVR訓練施設まで存在しているのだ。

『ボス、全滅させたぜ』

『周囲にも敵影無し、オールクリアです』

AK-47とM4A1が無線越しに言う。

「オーケー、敵はもういない。今日の訓練はこれで終わりだ。みんなお疲れ様、解散して各自休息を取ってな」

分隊の返事を聞くと、ヘッドセットを外してテーブルに置いた。

「指揮官」

どこか透明感のある、凛々しさと優しさを内包したような声が、VR訓練場のコントロールルームに響く。声の方を振り返ると、髪の長い妙齢の女性がこちらへと近づいてきていた。

どうでもいいが脳内で亜麻色の髪の乙女が流れたが、目の前の女性は明るい茶髪であって別に亜麻色ではない。

妙齢の女性、と表現したが、目の前の彼女が生まれてからの年齢は、おそらくそこらへんにいる高校生よりも小さいかもしれない。

「あ、春田さん」

「もう。スプリングフィールドです」

ブラウンのロングブーツを鳴らしながら、白いロングスカートと青い軍服を着た女性が歩み寄ってくる。

彼女はスプリングフィールドM1903小銃を扱う戦術人形だ。自他共に彼女の事を”スプリングフィールド”と呼んでいる。だが俺はそう呼ばず、春田^{はるた}さんと呼んでいる。

M1ガーランドもM14もスプリングフィールドなのに彼女だけ社名と同じ呼び方。どうも違和感を感じてしまったので、分かりやすく差別化をしたかったのだ。中国語ではスプリングフィールドを春田と表記するので、日本語読みして”春田さん”と呼んでいる。

とはいえスプリングフィールド本人にとってはあまり好評ではなさそうである。

「戦闘訓練の指揮お疲れ様です。コーヒーをご用意いたしました。良かったら一緒に頂いても？」

そう訊ねる彼女の手には、トレイに載せられたマグカップが二つ。

「ああ、ありがと。にしてもすげーピッタリなタイミングで来たな」

「そろそろかなと思ったので」

全てを受け入れてくれそうな品のある笑みを浮かべてスプリング

フィールドは答える。

「ジャックポット。さ、座って座って」

コントロールルームの中央には丸テーブルと椅子がある。一息つくにはちようどよい。スプリングフィールドに着席を促しつつ、自分も席に座る。

「はい。あつたかいもの、どうぞ」

先に俺の分のコーヒーカップをテーブルに置くと、スプリングフィールドも椅子に腰を下ろした。

「あつたかいもの、どうも」

置かれたコーヒーを早速手に取りつつ言葉を返した。

二人席に着き、ほぼ同じタイミングでコーヒーを啜る。

「ん、おいしい」

「ありがとうございます。……それで、訓練の方はどうでしたか」

「ん？ ああ、やっぱりみんな優秀だよ。三大アサルトライフル勢揃いさせてるし、P08もウージーも言わずもがなだし」

M4A1もといM16（まあどっちもAR-15系列だから多少はね？）、AK-47の二つはともかく、三つ目に何が入るのかは論争が起きかねないところではあるが。

「銃の性能に関係なくとも、皆さん優秀ですよ」

マルチモニタの方を眺めつつ、スプリングフィールドは言った。どうやら戦術人形ではなく、銃の性能で評価したことを見抜かれたようだ。美しい横顔に、わずかだが憂いが見えた気がした。

「ああまあ、それはもちろんそうだけど。力は使う者次第ってね」

「ええ」

第一次世界大戦時代の銃を使う彼女の前で、銃の良し悪しにフォーカスした言及をするのはちよつと野暮だったかもしれない。

だがM1903は、第二次世界大戦時にも狙撃銃として使われていたほどに精度の高い銃だ。旧式の銃だろうと戦術人形が手にすれば、自動式にも負けず劣らずの性能を発揮することには違いない。拳銃弾や5.56mm NATO弾などの対人用に作られた弾薬よりも、ハイパワーなライフル弾を用いるボルトアクションライフルだ。カー

トリツジの燃焼ガスによるエネルギーを、弾丸を発射すること全てに注ぐ分、高い精度と威力が保証されている。故に鉄血の人形共にも十分通用する、”アメリカンクラシック”の一つだ。

「ま、だからこそどんな時代の銃を使ってようと、戦術人形は頼もしいんだけどさ」

クソザコフオローをしつつ、コーヒーを一口啜った。

「指揮官にそう言っていただけだと、部隊も誇り高いです」

「ならよかった」

お互い軽く微笑みつつ、穏やかな静寂が訪れる。

「そっぴやさあスプリングフィールド……」

「なんです？」

「何でこの間任務で360クイックスコープしてたの？」

「ぶっへっつっ!!」

説明しよう！ クイックスコープとは、本来FPSゲームのスナイパーライフルで行うものであり、一瞬だけスコープを覗き、その瞬間に敵を撃つテクニックである。

そして360クイックスコープとは、ジャンプ又は高いところから飛び降りた際360度回転した後にクイックスコープを行うというものだ。

なお冷静に考えなくても成功率は低く、実用性などとは程遠いテクニックであり、マルチプレイなどでこれを多用していると味方からは当然嫌われる頭の悪いテクニックだ！

顔にほどよく温度の下がったコーヒー散弾によるヘッドショットを喰らったが、華麗に素早く胸ポケットから取り出したハンカチで顔を吹いてすっきり元通りになった。

「ああ申し訳——つてりカバリはやつ……じゃなくてなん、なななな

なんでそれを……!」

口を押えつつ顔を真っ赤にしてスプリングフィールドは分かりやすく動揺していた。

「いやね、キミらには言っただけだし、制圧済みの区域には偵察用のドローン飛ばしてんだよね。こないだ春田さん出撃したの、制圧済み区域に出た鉄血の無力化のためだったじゃん？ 俺指揮官だし、ドローンの操作権限もあるわけよ。ほんでちよっと時間もあつたから、何気なく春田さんのいる部隊の戦闘眺めてたわけですわ。したらまあー見てしまったわけよ」

「待って、待って言わないでください……!」

言葉と共に手をこちらに向けて待ったの意思を示すが、俺は止まらねえからよ。

「じゃあこつち」

タブレットを操作し、無線でコントロールルームのマルチモニタと接続。そして一本の動画を開いた。

「なんで動画あるんですかぁー……!!!!」

そして件の様相を映してある動画をマルチモニタの中でも一番おっきな画面で再生。キャプチャした動画は編集済みで今回のメイソンとなるシーンまでそう遠くはない。

「はい春田さん映った! いやあやっぱいつ見ても美しいっすねこの立ち姿。見てホラもうロングスカートと茶髪が風になびいてとっても美しい! おまけに立射でM1903構えてもう最高っすね!」

「とっ止めてください! 動画止めてえ!」

春田さんはがたつと立ち上がりこちらへ駆け寄る。

「おや春田さん銃を下ろしたぞ? 敵はまだいるのに一体どうしたんだろう。どうやら敵が移動して今の位置からは見えづらいようだ!

背伸びしてみるがどうも見えない! さあ一体どうするんだろう。おっと体の重心が下がったぞ。まさか、まさか……?」

「画面ロックされてる……!!」

顔の赤い茶髪の乙女はタブレットをひったくり動画を止めようとしたが、あいにくと画面はロック済みでパスワードを入れない限り解

除されることはない。

「飛んだあ！ 春田さん飛んだ！ そしてなんと回転している！ 空中でスカートとロングヘアを優雅に靡かせ回転している！ この状況でそんなことをするタクティカルアドバンテージなんてほぼないのに回転しているう！」

「なんでスローモーション編集加えてるんですか！ そのふざけた実況に合わせるためですかッ!？」

コントロールドームの大きなディスプレイ。そこにはスプリングフィールドがスローモーションで優雅に回転している様が、デッド・オア・アライヴの”You Spin Me Round”をBGMに映し出されていた。

「ハッハッハイエーリース」

五代雄介にも負けない笑顔とサムズアップを向けた後、再び実況再開。

「さあ360度無駄に優雅な回転を終え落下中！ 敵に向き直る。ようやくライフルを構えた！ そして撃った！ 一瞬！ あまりにも一瞬の出来事！ 一体何が起きたのか!? 再びスローモーションでVTRをご覧いただくよう」

「ご覧ただかなくていいですう！」

とうとう手段がなくなつたのか冷静な判断能力がなくなつたのか、こちらの目を両手で塞いできた。

だが気づいてほしい。編集済みな時点で既に何度かフル再生済みであると言うことに。そしてこの実況をするためにセリフとタイミングを覚えてきたということに。

「一回転を終え、その鋭い眼光で敵を捉える！ 普段の淑やかさの手本みたいな雰囲気とはえらい違いだ！ 凛々しくてかつこいおいぞ春田さん！ さあストックを肩にあて銃口を持ち上げていく！ そしてアイアンサイトと視線が一直線に……撃った！ もう撃った！ スローモーションで見てもなおお速い！ 数フレームでエイムを終え撃った！ 360クイックスコープだア！」

「あああああつ！」

マクミラン大尉のお馴染みの褒め言葉がVTRから流れ出すや否や、何かに耐えきれない春田さんが後ろで悶えていた。

人に近すぎるのも困りものと言うかなんというか。恥ずかしいという感情を戦術人形にインプットしているのは果たして正しかったのだろうか。

かわいいので正しい、次。

「さあ動画は360クイックスコープカムショットをキメた直後に戻ろう。春田さんは着地するなり敵の様子をうかがっている……おっとガッツポーズだ！ 脇を閉め拳を作り控えめにガッツポーズをしている！ これはポイントが高い！ どうやらしつかり命中したようだ流石俺たちの春田さんだぜ！」

「わ、私は何をしたって言うんですかあ……！」

かわいくてかつこいいことしたんだゾ。

「さあ戦闘も終わり、春田さんは何事もなかったかのように前衛の味方に向けてお馴染みのポーズ！ 淑やか！ 美しい！ 春田さん味方と合流すべく歩み出した！ さあ視聴者のみんなこの背中をよく目に焼き付けろ、これがベストクイックスコープ！ 春田さんだ！」

動画はようやく終わりを迎える。実況が終わる頃には少しばかり体温の高い春田さんが、俺の右肩に頭をもたれさせ顔を隠していた。

「二週間ぐらい前、社内の一部でクイックスコープがちよつと流行ってたね」

「……はっ」

「春田さん任務出たの一昨日ぐらいだったね」

「……はい」

「その頃流行りもほどよく落ち着いてあんまり話題見なくなってたね」

「……はい」

「みんな飽きてるし、いつも後方にいるキミはあんまり戦闘中誰かに見られることはないね」

「……はい」

「自律作戦だから指揮官にも見られないね」

「……はい」

「普段しつかり者だからアレだけど、1回やってみたかったんだね」

「……」

「360クイックスコープやってみたかったんだね？」

「はい……」

再び席についた春田さんは顔を真っ赤にして俯き、ひたすら俺の言葉に対しイエスで反応していた。

御覧、これが尊いって奴だ。

「まあほらいいじゃない。見たでしょ？ あんな綺麗に動画映えしてるんだから誰も笑わないって」

「そういうはなしじゃない……」

「訊いてみるけどYouTubeっべに上げていい？」

「だめに決まってるじゃないですかっ！」

「そっかあ……じゃあ個人で楽しむように留めとくわ……」

「ここ一番にガツカリした顔をよくも私の前で見せられますね……」

「じゃあ次360ノースコープやってm——」

「やりませんっ!!!!」

リアクション・トウ・コンタクト 1

二つの回転翼ダンデムローターによってもたらされる轟音が、その空間を包み込んでいる。細長い小さな部屋のような空間の壁には、十五人ほどの少女がいた。彼女たちは壁に備え付けられた椅子に座っており、今自分たちが乗っているものが仕事を終えるのをじっと待っていた。

そこは大型輸送チヌーヘリの内部。最初期のモデルが誕生したのは一世紀前だが、改良を重ねられており内部までは昔と同じわけではない。『間もなく到着だ。準備しろ』

パイロットが無線で伝え、座席に座る彼女たちが装備しているヘッドセットに音声が届く。それを聞くと、彼女たちは身につけているあるものに手を伸ばした。

それは銃だった。サイズや口径、種類は様々だが、少女たちは共通して銃を持っていた。

ある者はアサルトライフルに、ある者はサブマシンガンに、ある者はホルスターから取り出したハンドガンに。それぞれマガジンを一度抜いて給弾されているかを確認したり、チャージングハンドルやスライドを半分引き、弾丸が薬室ブレルに入っているかを確認チエツクしている。少女たちにとって、銃それらはどれも少しばかり持て余す大きさに見える。だが、彼女たちは見た目に似合わず、恐ろしいほど手慣れた手つきで銃を扱っていた。

銃の引き金を引くだけなら誰でもできることだが、当然上手く扱うにはある程度の訓練が必要になる。ヘリに乗っていることすら似合わないような女の子が銃に手慣れている様は、ある意味非現実的な光景だった。

彼女たちは戦術人形。人の代わりに銃を持ち、銃の名を授かり、そして銃を抱えて戦場へ赴く人造おにんぎょうの少女。見た目はもちろんのこと、振る舞いも人間に非常に近い。だが、決定的に人じゃないと分かる要素がある。

搭乗員15名は、一様に同じ見た目をした者が三人ずつ集まって作られていることだ。同型ダミの人形ミイをリンクさせて制御することで、同じ

人形を同時に制御、運用できるダミーリンクシステム。資源と金、設備さえあればいくらでも作れる戦術人形だからこそできる芸当だった。

チヌークに乗せられたこの十五人——あるいは五つのグループ——は、今戦場へと赴かんとしていた。

銃だけではなく他の装備品の最終確認も終え、戦術人形たちはヘリの到着に備えた。

やがてヘリは目的地へとたどり着き、降下。ダウンウオツシユが周囲の草木をなびかせ、土煙をまき散らす。後部のハッチが開き、続々と武装した少女たちが地面に降り立ってゆく。

「第三部隊到着しました」

ヘリに乗っている時とは違うヘッドセットをつけた、黒髪の少女が誰ともなく言った。ライトグリーンのメツシユが入った長い黒髪の少女の手には、M4A1が握られている。

30連のマガジンやバレル、バツファチューブは黒のままだが、他は基本タンカラーで統一されていた。伸ばしたストックから覗くバツファチューブの部分に、バツ印に細いテープが貼られている。それは彼女のメツシユと同じ色をしていた。アタツチメントはフォアグリップと、おなじみEOTech社製ホロサイト。それからマガジンにはマグプルが取り付けられていた。

服装は黒いショートパンツにグレーのノースリーブセーターを着ており、上からチエストリグを身に付けている。腰にはジャケットを巻き、脚には、膝までを覆う強化外骨格が装備されていた。首元にはドクロの模様が描かれたバンダナを巻き、上腕にはライトグリーンの腕章が、それは肌と一体化しているサイバネティクスパーツで固定されているようだった。腕章はG & amp; KPMCのロゴマークが描かれている。

数秒と経たず、ヘッドセットからは男性の声が返ってくる。

『了解第三部隊。早速だが地図を見てくれ』

彼女らの目に備わるAR技術により、彼女たちの視界にマップが表示される。傍から見れば虚空を見つめる少女たちだが、傍から見る者

は現状誰もいない。

『他の部隊の活躍である程度は制圧したが、彼女たちはだいぶ消耗してしまった。残るタスクはここにある敵司令部の制圧と、道中の鉄血の**バトルロイド**の無力化。君たちにはそれをやってもらおう』

無線越しに少女たちの指揮官の指示が伝わり、それに合わせてマップのとある地点がハイライト表示される。

「美味しいトコだけ持ってくなんてなんだか悪いわね」

二挺のマイクロUZIをスリングで肩に下げた少女が口を挟んだ。薄い青緑の髪をツインテールにし、野戦略帽を頭にのっけている。豊かな胸の谷間と、すらりとしたお腹を大胆に見せつけるようなチョッキを身に付け、上からはノースリーブかつ丈の短いフード付きジャケットを羽織っていた。下半身はショートパンツに黒いニーソックス、ブーツを穿いている。

膝にはニーパッドを装備。両の太ももの位置にはマグポーチが巻かれており、フルロードしたマガジンが4本納められている。ずり落ちたりしないよう、ショートパンツのベルトと繋がっていた。ショートパンツのベルト、右腰の位置には焼夷手榴弾が収められているポーチがあり、左側にはさらにUZIのマガジンが収められたマグポーチがあった。

『それは成功してからのセリフな』

「う、うるさいわねわかってるわよ」

『ならよし。司令部に近い分敵もそれなりに厄介な可能性もある。十分警戒して進んでくれ』

「はーい！ 行って来ますねえ、ダーリン」

鈴の音のようなハイトーンな声を発するのは、金髪を肩にかからない程度まで伸ばした少女だった。白いシャツと白いミニスカート。対して上からは涅色の半袖ジャケットを羽織っている。豊かな胸元には、星条旗をモチーフにしたネクタイが二つの双丘に挟まれている。

腰の左右にあるレザーホルスターには、それぞれにM1911を収めている。右側には黒、左側には、銀色に光るステンレスのガバメン

トだった。ファーストライオン腰のベルトには他にもマグポーチやグレネードポーチが装着されており、各々その役目をフルに果たしている。

加えて唯一、彼女だけがバックパックを背負っていた。レンジャーグリーン暗い緑色、HEXGRIDシステムを搭載しているのが分かる。

M1911のいつもの言動を右耳から入れ左耳からリリースしながら、M4A1はチャージングハンドルを半分引き、薬室に弾があるかを再び確認。

「了解です。移動します」

パチリと左手でライフルのダストカバーを閉じると、部隊の全員の顔を見る。

自分のダミーである二体のM4A1。M1911、マイクロUZ I。それから、二人のアサルトライフル。

一人は、世界で最も人を殺したアサルトライフルを手に持っていた。木製のハンドガード、グリップ、ストック。太陽に照らされ銀色に光るボルトキヤリア。名銃AK-47を肩に担ぐのは、金髪の少女だ。

「さっさと行こうぜ」

赤いベレー帽に赤いマフラー。ショートパンツに、ビキニのような服を着た露出の多い服装だ。腹部にはマグポーチを巻き付け、腰には柄付きグレネードが固定されたポーチがある。足には黒いブーツと、迷彩柄のチャップスに似たものを穿いている。

そしてもう一人は、一番長い銃を持っていた。H&mp・K社製のバトルライフル、G3。長い銃身の下には一回り大きい金属の筒が取り付けられている。薄い金髪のロングヘアが風になびき、左右の耳の上にある黒いヘッドギアが時折顔を見せていた。

軍服を彷彿とさせるベアトップを着、上からはボレロを羽織っている。タイトなミニスカートとブーツを穿き、白い脚が大胆に晒されていた。腰のベルトにはマグポーチ等が取り付けられている。

五種類の銃、そしてそれらを持つ十五人の少女たちは、行軍を開始した。

リアクション・トウ・コンタクト 2

ウージーを先頭にAK-47とM1911が続く。そのあとをM4A1、G3が追従していた。各自広く間隔を空け、ウージーを基点に渡り鳥のようなV字の陣形を作っていた。

彼女たち第三部隊は今、木がまばらに生える林の中を歩いている。部隊の各自の視界には、拡張現実^A_Rによって様々な情報が表示されている。視界の端には縮小されたミニマップ。それから、それぞれの得物の残弾や、情報を簡略化されたバイタルデータ。遠くの空には、目的地の真上から伸びている光が見えていた。

敵が司令部としている場所は、今やすっかり廃墟と化した大型のショッピングモール。まだ遠いが、それでもかつての繁栄を示すかのように大きく見えていた。

「念のために準備してたけど、結局出ることになったわねえ」

ストックを広げたマイクロUZIを手に持つ彼女がぼやく。もうひとつはスリングで後ろへとやっていた。歩きたびに銃が揺れてお尻に当たっている。

「元々は第一と第二の方たちで済ませる予定でしたね」

周囲への警戒を怠らないまま、G3がUZIに言葉を返す。

「ボスはドンパチの時の指揮はまあまあ良いんだけど、先の見通しがちっと甘いよなー」^{あめえ}

AKが言葉を挟む。それを聞き、M1911がムっとAKの方を睨む。

「ダーリンの悪口は許しませんよー」

「ドンパチの指揮はホメてやってんだからチャラにしてくれ」
「ならよし」

いつもの調子で、部隊の面々は言葉を交わす。銃の名に恥じない経験と戦績を残してきた者たちだ、この任務も、普段通りにこなす内の一つでしかない。

だからこそ、彼女の目が捉えたそれも、特別なことではなかった。

「……コンタクトッ！ 11時100メートルッ!!」

先頭のマイクロUZIが叫ぶと同時に、銃を撃つ。素早くストツクを肩に当て、前方のとある方向へとフルオートで9ミリ弾をばらまいた。制圧射撃を兼ねた先制攻撃。排莖口からいくつも空薬莖が飛び散っていく。

”銃を撃つ”という行為は何も、敵を斃すためのものではない。分かりやすい応用例として物の破壊というものもあるが、”弾丸が何発も飛んでくる場”を作り出すというものもある。自分が隠れている場所やそのすぐ側に何発も弾丸が飛んできては、当然顔を出すことなど誰もしたくはない。出したとしても、落ち着いて狙いを定めることは難しいし、そんなのききなことをしては撃たれてしまう。それは人間でも人形でも同じことだ。被弾すれば戦えなくなり、目的が果たせなくなるのだから。

乾いた銃声が連続して林に響くよりも早く、部隊の戦術人形たちは動いていた。M4とUZI以外の戦術人形たちは、近くの身を隠せそうな木へと駆け出していた。M4とUZIも、一瞬遅れて本体だけがカバーポイントへと走る。残るダミーは他の人形たちが安全にカバーポイントへ隠れられるよう制圧射撃を続けていた。

UZIは両ひざを地に付け、カバーポイントたる木の陰へとスライディングして隠れる。ダミー人形とは視界を共有できるため、制圧射撃を続けるダミーの視界を通して敵を確認していた。

彼女らのいる位置から11時方向、おおよそ100メートル先に人影。この辺りに民間人は基本いない。いるとするならば、はぐれたグリフインの戦術人形か、もしくは――。

「鉄血のブリキ共よッ！アサルトライフル二人、他にもいるけど不明！ちよつと指揮官ッ!?」

我らがエネミー「あいつがエネミー（幻聴）鉄血兵。UZIが捕捉したのはアサルトライフルを装備した鉄血の人形”スズメバチ”。ヘルメットのようなバイザーを被っており、太陽の光を反射しているのが見えていた。その辺りには小さな丘があり、鉄血兵はちょうどそこを越えようとしている所だったようだ。

UZIの本体が、司令部にいる指揮官に向けて怒鳴っていた。直

後、自身のダミーをカバーポイントへ移動させるため援護射撃を開始。M4も同じく、ダミーのために援護射撃を開始した。

敵兵もUZ1とほぼ同じタイミングで彼女たちに気づいていた。“スズメバチ”の一人もUZ1に対抗すべく、ほぼ同じタイミングで弾をばらまいている。

グリフィンドールの武器と鉄血兵の武器。単純な武器の性能差を比較すれば、どうしても上に立つのは鉄血兵の武器だ。

銃撃を行いながらカバーポイントへと移動していたUZ1のダミーたちだったが、一人の腹部に敵の弾丸が突き刺さった。ダミーは衝撃で後方へと引つ張られるように体をくの字に折る。人造の綺麗な腹からは、真っ赤な人工血液や生体部品の破片がまき散らされた。

RIP

X x x | M I C R O | U 2 1 | D U M M Y | x x x

B G M : E n y a | O n l y T i m e

「ああもう…ダミー一人被弾！」

木の陰から斃れるダミーを見ながら、マイクロUZ1本体が言った。視界には地面に力なく斃れたダミーと、拡張現実に表示されるダミーのバイタルデータ消失のサイン。

『マジかよ、クツソ今敵見えたスマン。UAVからじゃ見えんかった』
グリフィンの指揮官は、上空にて常に待機しているUAVからの映像で戦闘指揮を行っている。だが彼女たちが今いる場所は、木がまばらに生えている林。葉と枝を豊富に蓄えた木の下に敵がいたとしても、UAVからは確認できないのだ。

「ダミーもカバーに入りました。リロードします」

M4が無線で各部隊員に知らせつつ、空のマガジンを落とす。木や、土の盛り上がった場所等に、M4とUZ1のダミー人形もカバーへと隠れ終える。

「援護しますー！」

G3は銃を構え、体を少し傾けて陰から身を出す。バトルライフルの重く鋭い銃声が響く。ダミー人形も、本体に合わせ制圧射撃に参加。

他のライフルに比べ、M4A1——もといAR—15はリロードの速度が圧倒的に速い。これは戦術人形の性能差というより、銃そのものの構造にある。マガジンはボタンを押すだけで自重で落下し、その後弾を装填する時もAKやG3のようにチャージングハンドルを引かず、ボルトストップを押すだけで装填できる。マガジンを放り捨てるファストリロードを行えば、最も速いのはAR—15だ。

「装填終了！」

だからM4のリロードとG3の制圧射撃はわずかな時間で終わり、再び制圧射撃は高火力を取り戻す。

「いつものプランでやります」

M4が一瞬銃撃を止め、皆に知らせる。その後すぐに再開。

「移動するぜッ！」

指示を聞いたAKがカバーから飛び出し、敵の方へと回り込むべく走り出した。

「回り込みます」

G3もそれに合わせ木の陰から飛び出し、AKとは反対側に回り込む。

「カバーー！」援護します！」

UZIとM4が引き金を引き、彼女らを援護。

林の中にある丘の方を睨みつつ、AKとG3は走る。戦術人形の間離れた走行速度をもってすれば、制圧射撃のせいで顔を出せない鉄血兵を視界に捉えるまでそう時間はかからない。

「いたッ！アサルトライフル二人、ライフル二人！」

「こちらも確認。敵はそれで全部のようです！」

部隊に知らせつつ、AKとG3はほぼ同じタイミングでライフルを構えた。腰を少し落とし、上半身を安定させることを優先にして移動を続ける。そしてそれぞれ敵を照準内に補足。

そして距離を詰めながら、二人は攻撃を始めた。
7.62mm×39弾と7.62mm×51弾。二つの7.62ミリ弾丸が、鋭い銃声と共に敵部隊を左右から突き刺してゆく。

鉄血兵のアーマーによって、時折弾丸は弾かれていた。しかしそれ

によって、銃撃という攻撃全てを防ぐことができるわけではない。銃撃は弾丸を突き刺すことだけではなく、標的まで運ぶための衝撃力も同時に備わっているのだ。

アーマーで弾丸を弾こうとも、備わる衝撃を殺しきることはできない。ましてや戦術人形の操る正確な銃捌きランアンドガンによる銃撃をもってすれば、鉄血兵といえど容易に反撃に転ずることはできない。

ライフル弾の横風の雨。衝撃力で鉄血兵の動きを封じるだけでなく、とうとう頭のバイザーや銃本体など、耐弾性のない箇所にまで及ぶ。鉄血兵のバイザーや銃には銃痕がいくつも生まれていった。頭を貫通したライフル弾は後頭部から人工血液や生体部品、電子回路をまき散らす。

7.62mm弾を近距離で使用すると威力が高すぎて貫通し、かえってダメージを与えられないという話がある。だが戦術人形や鉄血の人形は通常の人間よりも遥かに耐久性が高い。その防御力が、被弾部位によってはバトルライフルが最適なダメージを与えられることに助力していた。

一方的な殲滅は10秒とかからなかった。

ダミー一人に援護を任せ、AKとG3はリロードを行う。AKはマグポーチから新たなマガジンを取り出し、マガジンの上部でマガリリースレバーを押しつつ、空のマガジンを弾き捨てる。そしてマガジンを装填し、左手を銃の下から回してチャージングハンドルを引き初弾を装填。

「……クリアー！」

「クリアー」

AKとG3は、鉄血兵が完全に沈黙したことを確認。その後周囲を見回し、さらに敵がいなかを確認する。

「……うし、オールクリアー！ 勝ったぜ！」

ライフルを肩に担いでAKは言った。

「周囲にも他に敵影は確認できません」

M4が言う。

『UAVこつちからも敵影は確認できない。けどまだ隠れてる可能性は捨て

きれないから、注意は怠らないように。……損害は、UZIのダミーだけか?』

「はい。他は誰も負傷していません」

『わかった。UZI、ダミーの損傷具合は』

「腹に直撃よ。血とモツまき散らして無残にね。それだけかしら」

『了解。作戦が終わって地域を制圧出来たら、スタッフさんに回収してもらおう。スマンな』

「いいわよ。……怒鳴った私の方が悪かったわ」

『じゃあお互い様ってコトで。……ともかく第三部隊、まだ本番はこれからだ。十分警戒して進んでくれ』

「はい」「ええ」「はい」「おう」「了解」

各々自由に了承の意を示すと、再び一行は目的地へ向け行軍を再開した。

リアクション・トウ・コンタクト 3

「こちらM4、位置につきました」

『G3、いつでもやれます。そちらのタイミングで』

木の陰に隠れたM4がライフルを構える。そのまま体を傾け、木陰から半身を現した。彼女のホロサイトが捉えんとしているのは、巨大な廃墟の屋上にいる一人の人形だった。

偽装迷彩の施されたポンチョ、モノアイのゴーグル、真ん中分けの黒髪。最新式ライフルによる長距離攻撃を主とする”イェーガー 猟兵”モデルの鉄血兵だ。

残り少ない兵員でなんとか司令部を守るために鉄血側のとったベターな配置。屋上のスナイパー。

M4の部隊は相手の監視をかくぐり、スナイパー相手でも戦えるよう距離を詰めていたのだ。彼我の距離はおおよそ70メートル。ゆっくり顔を出して狙いを定めてはすぐに気づかれる。銃と半身を晒すと同時に、トリガーに指を当て照準を合わせる。

「今」

鉄血兵イェーガーが自分を狙う戦術人形トリドルに気づく。M4の視界で、レッドドットが鉄血兵の頭と重なる。

瞬間、M4A1の引き金が絞られた。放たれる一発の弾丸。鳴り響くは二つの銃声。

M4の攻撃に合わせ、G3もまた鉄血兵の頭部を撃ち抜いていた。二人の同時攻撃シンクショットは、屋上の警備たちを1秒も経たずに片付けてしまった。応戦する間もなく、屋上の欄干の向こう側に人形がくずおれていった。

『三人、備え』

ライフルの銃声が響き終わるのを待たず、指揮官の声が無線にて流れる。UZ1、M1911、AKの三組さんじんは、ショットピングモールの二つの出入り口にてそれぞれ待機していた。銃声に気づいた敵が応戦するのを待ち構えている。

狙撃による銃声が響き終わるが、その後に聞こえるのは外の静かな

環境音だけ。

「……出てこないわね」

4.5口径ガバメントの拳銃を構えている1911が呟いた。

「巢穴突かれたアリアミたいに出てくんの期待してただけど」

『つつついいことあんの？』

「ちつがうわよつ、周知としてある事実でしょーが！」

茶化すように訊いてきた指揮官へUZIは音量を抑えて答える。

「ならこつちから巢穴に突っ込んでくか？」

AKの言葉を聞き、M4が口を開く。

「それには賛成ですが、分散して複数の場所から同時に突入します。1911とG3は、グラップリングフックで屋上へ登ってください。そこからG3と1911は3階。UZIとAKは突入後1階へ、私が2階にてそれぞれ索敵を行きましょう」

モールが3階建ての建物であることは、接近する時に指揮官から情報が入っていた。

「それだと各個撃破されませんか？」

G3が問う。言う通り、もし一組ひとりが一斉に襲われれば勝ち目はない。グリフィンの人形も鉄血の人形も、人間を超えた力を持つが、基本的には人間が殺し合っていた時と同じだ。戦闘員の数の多さはそのまま勝率へ繋がっており、分散はすなわち単純な戦力の低下を意味している。

「待ち伏せされて一網打尽にされるより、位置の把握を優先した方がいいかと」

だが、戦力を維持していても敵が見つからないのでは意味がない。銃撃戦に限らず、戦いにおいて敵の居場所が分からないのが最も恐ろしい。

「……それもそうですね、了解。行きましょう1911」

「はい」

「AKとUZIは北の入口から。私は南側から行きます」

『司令部にモールの地図はない。その手のモールなら大抵出入口に見取り図があるだろうから、誰か見つけ次第共有しといて』

M4、AK、UZ-Iはそれぞれ出入り口の付近にて待機。1911とG3は、モールを囲むパーキングエリアに点在する廃車などをカバーポイントとし、モールからの攻撃を警戒しながらそこへと集合した。

モールの壁に到着した二組^{ふたり}。1911のダミーが、自身の背負うバックパックを自分の本体へと向けた。ホルスターに銃をしまった1911は、代わりに別の銃を取り出した。

目を引くのは、銃身の先から飛び出た鉄鉤。鉄鉤と同時に銃身からロープが出ており、それは銃身下にある円筒状の容器の中へと伸びていた。

彼女が手にしたのは、通称「アセンション・ガン」。高いところへ上るためグラップリングフックを射出することができるガジェットだ。名の由来は、2062年^{いま}ですら根強い信者の多いスター・ウォーズに登場した、同じ用途のガジェットから。シークエル・トリロジーの是非は、ファンの間では未だに議論が続いている。無法化した場所によつては、それが原因で銃撃戦が起きることも珍しくはない「要出典」。

1911は後方へと下がりながら折り畳み式のストックを展開し、ピストルグリップを握る。ストックを肩に当て、照準器を覗きながら屋上の欄干へアセンション・ガンを掲げた。

「こちら1911、アセンションガンを使うわ」^{ナインティーン}

銃声は普通の銃よりは小さかった。射出するフックは普通の銃弾より重く大きいため、発射速度は弾丸よりもはるかに遅い。故に通常の銃で起きる弾丸のソニックブーム音が発生しないのだ。

ロープで軌跡を描き、フックは重力に逆らって飛翔する。軌跡は途中で山を描き、そして重力に従い落ちていく。フックの軌跡は、廃墟の壁に生まれた一直線へと形を変えた。

1911はそのロープに近寄ると、アセンション・ガンをその場に置いてロープを引っ張る。数回引っ張ってフックが固定されていることを確認。

「オツケ、大丈夫そうね」

「ダミーを先行させましょう」

○

「ようやくサブマシンガンが本領発揮できる戦場って感じだわ」

「インドアは滅多にねえもんな」

「全くよ。グリフィンの戦術方針だかなんだか知らないけど、野外戦でも引つ張り出されて囷役。百年前じゃないんだから……」

「でもそれであたしら助けられてんだぜ」

『ああ。カバーポイント転々と走り回って敵を引き付けるなんて、貧弱一般人にはなかなかできない。それにタンクは超重要なロールだぞ。囷というより、パーティーへのヘイトを一身に受け止めるメイン盾だからな。あkはそれを分かっているから本能的に長寿タイプだが、それが分からないと裏世界でひっそりと幕を閉じることになる』

「任務中にブロント語使わないでよ……。まあでも言いたいことは分かったわ、ありがと」

「お喋りはそこまで。こちらAK、入り口に着いたぜ。突入まで待——」

つ、まで言いかけた時、被せるように指揮官の声。

『1911、屋上SMG二人！ 距離三十メートル、フックには気づいてない。登り切ったら（屋上の）縁にぶらさがって待機。タイミング見計らって1911飛び出して陽動。その後G3が昇って攻撃。あとダミーに発煙手榴弾渡して』

「ブロント語使ったり戦闘指揮したり忙しいわね」

「多重人格かよ」

『二人ともうるさい、1911了解』

七割ほど登っていた1911とG3のダミー。指揮官の指示を受け取ると、まだ下にいる1911の本体は腰のポーチから発煙手榴弾を取り出した。ロープにしがみつき、壁に待機しているダミーへ向けてそれを投げて渡す。コントロールも投擲距離も、Tドールには問題

ない。

『M4、UZ I、AK。1911が交戦したらキミらも突入だ』

1911は壁で待機するダミーを操作。腰のポーチに受け取ったスモークグレネードをしまう。そして思いつきりロープを引くと同時に壁を駆けのぼる。ロープを離さない程度に手を緩め、するとロープを手の中で滑らせつつ壁を数メートル登る。それを数回繰り返し、素早く登り切った。屋上の縁を掴み、腕力のみで体を持ち上げる。懸垂のように体をゆっくり持ち上げ、屋上を覗く。

そこは屋上駐車場。街灯のような照明のためだろうか、配電ボックスが点々と配置されており、銃撃戦ガンファイトに困ることはなさそうだ。

そして二人の鉄血兵。見慣れたSMGを持つ型モデル、「リップパー」。互いに背中合わせで、死角を作らないよう屋上を見渡している。

「バレずに出るのは無理ね。G3、私が昇ったらすぐ続いて」

「了解。陽動頼むわね」

「ええ」

腕力のみで体を持ち上げ飛び上がり、屋上の縁から欄干へと手を移す。さらに飛び上がるように欄干を乗り越え、屋上駐車場へと着地。

リップパーの一人と視線が合う。そいつが銃口をこちらに向けるよりも一寸早く、1911は駆け出していた。最も近い遮蔽物は配電ボックス。

弾丸がばらまかれるが、高速で駆けるTドールには当たらない。滑り込むように1911は配電ボックスの陰へと隠れる。配電ボックスは少しかがめば人が隠られるほどの大きさをしていて。カバーポイントとして申し分ない。

「1911、交戦エンゲージッ！」

『ハデトゥーハンドに二丁拳銃を活かせ』

指揮官の声を聞き、口元に笑みを浮かべる。ジャケットの裾を後ろへと払い、腰の左右にあるガバメントを引き抜く。

白い手袋をはめた右手には、黒いスタンダードなガバメント。黒い手袋をはめた左手には、ステンレスの銀に輝くガバメント。両手に生まれるコントラスト、十六発の脅威。

『こちらM4、突入します』

『こちらUZI、AKと一緒に入るわ』

リッパ二人は配電ボックスへとサブガンを撃ちつつ、それぞれ身近な遮蔽物へと移動する。

『1911、十二時方向室外機と一時方向配電ボックス、敵それぞれ移動』

上空のUAVから戦闘状況をモニターしている指揮官から情報が入った。

鉄血兵二人はカバーへの移動を優先すべく、二人共フルオート射撃をしたためリロード時間が被っていた。1911はそこを見逃さない。

遮蔽物から飛び出す。Tドールの常人離れした脚力で駆けだしながら、1911は二挺のハンドキャノンで敵へと吠えた。廃墟の屋上で、45口径の発砲音がいくつも轟く。

Tドールといえど二挺拳銃で高い命中率を保つのは難しい。だがそれでも、移動しながら効果的な制圧射撃を行うくらいのは可能だった。

全速力で走りながら両手のガバメントで弾をばらまく。グラップリングフックのある方から鉄血兵の視線を逸らすべく横方向へと走る。

9ミリパラベラム弾よりも少し太く短い空葉莢が、地面へきりんきりんと音を立てて落ちていく。Tドールの走った軌跡を描いていた。

十六発の弾が切れるころには敵も遮蔽物の後ろでリロードを終えていたが、1911も次の配電ボックスへとたどり着いていた。

一寸遅れて敵の反撃が行われるが、弾丸が向かう先に1911はいない。

「アムアウト弾切れ、リロード」

『よし1911、スモーク発煙手榴弾焚いて敵の視界塞いで。煙広がったらG3に合図』

指示を聞きつつ、1911は空のマガジンを落とす。ホールドオープンしたガバメントを重ねて二つとも右手で持ち、左手で腰の二連マ

グポーチから二本のマガジンを引き抜く。二つのマグウエルに二つのマガジンを同時に叩き込み、再び左右に銃を持ち直してスライドのロックを解除。銃が息を吹き返す。

「了解ッー」

右手のガバメントをホルスターにしまい、代わりにスモークグレネードを取り出す。銃を持った左手の中指でピンを引き抜き、遮蔽物の上から投げる。

レバーが外れ、缶と共に戦場へ放り出される。コンクリートの床かららんころんと転がって数秒、底が炸裂し、勢いよく煙が噴き出し始めた。白く濃い煙がもうもうと吹き出、あつという間に鉄血兵の周囲を白く染めていく。

「G3ッー」

『はいっ』

エルードして待機していたG3が1911がやったように屋上へと降り立つ。スリングで背負っていたライフルを構えながら、1911が先ほどまで隠れていた配電ボックスへと身を隠した。

『煙消えたら私が引き付けるから、G3横から叩いて』

「了解」

1911の言葉に返事をしながら、G3はライフルを構え配電ボックスの横から身を出す。狙う先は白い煙。消えるのを待つ。

「援護ッー」

1911が遮蔽物から半身を出す。銃を縦に並べ、露出面をできるだけだけおさえつつ二丁拳銃で陽動を行う。リッパーの隠れている室外機に何発もの45口径弾が突き刺さり、鉄血兵をそこへ封じ込めた。

それをアイアンサイト越しに鋭く睨むG3の目視。照準はリッパーの頭を捉えていた。白い指がそつと引き金を絞る。バトルライフルの咆哮。

刹那とも言える時の中、小さな金属の塊は衝撃を纏って空気を突き破る。やがてそれは機械人形の頭へ到達。その頭を突き抜けると共に、衝撃で頭の中をぐちゃぐちゃにかき乱す。人工血液や生体部品と共に反対側から突き抜け、その弾丸は役目を終えた。

「敵仕留めました」

『ツうあつ！ 1911被弾ッ!!』

G3の報告とほぼ同じタイミング。1911の悲鳴が無線に入る。二丁拳銃といえども、流石に二挺のサブマシンガンには敵わない。1911の生んだわずかな隙は敵の一人を仕留めることに繋がったが、肝心の1911は無事では済まなかった。制圧射撃に反撃したリッパの弾は、1911の右腕や右目に命中。

G3からはもう一人のリッパは遮蔽物のせいで死角になっていた故、位置を変えなければ援護が届かない。その判断を下し実行するのは言うまでもなかったが、それより敵の方が速かった。

被弾の衝撃で隙ができた1911に、リッパは攻勢に出る。カバを出、1911を中心に円を描くように移動。1911の全身を捉え、フルオートで弾丸を叩き込む。

無数の弾丸が突き刺さり、1911のダミードールのダメージが限界を超える。ロープにつかまって待機しているメインフレームの視界に、ダミーのバイタルデータ消失のサインが表れた。

『1911ダミーダウン。G3気を付けて』

その無線を聞くと同時に、遮蔽物を飛び出していたG3は敵を捉えていた。

「このっ……！」

当てることを優先に胴体に向け一発。その後距離を詰めつつセミオートで弾丸を叩き込んでいく。腰を落とし上半身を安定させ、前傾姿勢で反動を受け止めることで、バトルライフルでも精度の高い連射を可能としていた。

近すぎるほどに距離を詰める頃には、鉄血兵も1911のダミーと同じように銃創だらけになって事切れていた。

ちょうど弾切れになっていたダミーのライフル。ボルトハンドルを引き、固定。親指でマグリリースレバーを押してマガジンを抜く。腰の後ろにあるダンプポーチ——空のマガジンを入れるポーチ——にそれを放り入れると、マグポーチから新たなマガジンを取り出し装填。固定されているボルトハンドルを叩くように解除し、初弾を装填

する。

「フリー……クリア」

銃口を下げ、周囲を見渡して敵がいなかったことを確認。車が昇ってくる通路や客用の出入り口のドアの警戒はダミーに任せ、G3はダミーの操作を解除。

1911とG3はメインフレームと残りのダミー共に全員屋上駐車場へとたどり着く。

「やっぱやられちゃったなあ……」

特に表情を変えることなく、ズタボロのダミーを見て1911は呟いた。

『サブマシンガン二人相手にダミー一人、仕方ないっちゃ仕方ない』
指揮官も、彼が率いるTドールも、それなりに実戦を積んできている。今更ダミーが2, 3やられる事自体で気が揺らぐことはなかった。「本体が無事なら万々歳、資源管理に目を瞑れば」部隊も指揮官もそんな気持ちである。

『さて、あとはキミらの目が頼りだ。まだ中で敵とは遭遇していないようだが、気を付けてくれ』

部隊全員が屋内に入るため、UAVからの戦況把握は行えない。今後はTドールの目からの映像で戦況を把握するしかない。

リアクション・トウ・コンタクト 4

先頭を歩くUZIの足が止まる。

「こちらUZI、地下へのエスカレーターを見つけたわ」

視界の端に映し出された一枚の画像を一瞥してUZIが言った。それは先ほどUZI達が見つけたシヨップピングモールの簡素な見取り図だった。視界をスクリーンショットし、オートトリミング機能で余計な部分を切り取ったマップ画像。本来モール内の各店舗への案内であるため、建物の構造を把握するには少し情報が足りないが、ないよりはマシだった。

『そこへ向かうのは1階のクリアリングを済ませてからだな』
「了解」

1911達の戦闘が行われた後、部隊は各回の索敵を行っている。1911とG3は三階の索敵、そして非常階段から突入したM4は二階を索敵していた。

M4A1は肩にストックを当て、銃口を少し下げた状態で銃を構えつつ歩を進める。

つい先ほど屋上で戦闘があったにも関わらず屋内は酷く静かなものだった。聞こえるのは、足を覆う強化外骨格と一体化したヒールブーツと、自身の衣服や装備の布がこすれる音。それが三人分。屋上の奴らと違い、屋内の鉄血共は勇んで戦いを仕掛けてくることはないようだった。

先頭をダミードール。そのすぐ後ろに、ダミーを盾にするようにメインフレームが追従する。もう一体のダミーは他方向の警戒だ。

上階への視認性や誘導といった観点から吹き抜けとなつているこの建物は、店の仕切りに隠れているかもしれない敵だけでなく、上階からの攻撃も予想される。散開して各階を索敵するのは、これを防ぐのにちょうど良かった。

各階をクリアリングしながら、戦術人形たちは着実に敵へと迫っていく。

モールの突き当りにある少し広い店(だったエリア)にたどり着く。

残るはここだけだった。品物の代わりにゴミや埃を並べた陳列棚が点在する。遮蔽物としては心もとないが、グリフィン^ての^き人形から姿を隠すだけなら都合が良い場所だった。

ダミーと分かれ、散開してその部屋のクリアリングにあたる。散開してもなお広く死角の多い場所だった。

空き缶の転がる音がした。それは部屋の奥へ到達し、引き返すと共に最終確認を終えようとした時だった。それはM4^しA1^ぶたちが発した音ではない。

「ツー」

M4は音がしたと思われる方向に銃口^{しせん}を向ける。少し離れた場所にある陳列棚。その陰に音の発生源はありそうだった。

その通りと言わんばかりに、音の発生源と見込んだ場所からわずかな赤い光が漏れた。それに続くように、似た光が点々と部屋のいろんな場所に現れ始める。

思い浮かべた敵の姿と、そいつの普段との振る舞いの違いに、思わずM4の顔に苦笑が浮かんだ。

「———こんなことするんだ」

固いものが何度も床を叩く音と、モータの駆動音。そして危険を意味する赤い光が広がっていく。

戦闘用にしては小さい四角いフォルム。ボディの上部にはミニレールガンが搭載されている。赤く光る大きなモノアイと簡素な四本足のせいでどこか愛玩用ロボットにも見える鉄血の兵器「ダイナゲート」。

巧妙にクリアリングから逃れていたダイナゲートの群れが、一斉にM4A1へと襲い掛かってきた。

「コンタクトッ!!」

M4は近くに現れたダイナゲートの赤い光に銃口を向ける。引き金を絞り、フルオートで数発弾丸を叩き込む。

小さく素早い、耐久性は低い。当てれば壊せるし、当てられない彼女^{M4A1}ではない。

ただど塵も積もれば山となる。

(数が多いっ……！)

接近してくるダイナゲート共を処理しきる前に、距離を詰められ取りこぼしに攻撃を受ける可能性が高かった。

敵の有効射程に入る前に踵を返し、距離を取るべくダイナゲートに背を向け駆け出す。

「嘘っ……！」

だが反対側からも、同じように数匹のダイナゲートの群れが襲い掛からんと距離を詰めてきていた。

M4は即座に周囲を確認、速度を緩めず走り続ける。そのまま走り続ければ一秒と経たない内にダイナゲートの射程に入り、ミニレールガンの雨が猛威を振るうことになる。

(ちよつとびつくりしたけどまだ道はある……！)

「上っ！」

しかしM4は床を蹴り、側にある陳列棚に足をかけてさらに飛び上がり、空中へと飛び上がった。正面にいたダイナゲートたちのミニレールガンから弾丸が放たれるが、突如上へ回避したM4には当たらなかった。

それだけで彼女のターンは終わらない。ダイナゲートの群れを飛び越えると身をひねり、百八十度空中で回転する。黒髪と腰に巻いたジャケットが靡き、弧を描く。

空中でライフルを構えホロサイトを覗き、戦闘処理の中でも射撃統制の処理を一時的に優先。彼女は一定時間、通常より効果的に銃撃を与えることができる。

刹那の世界。EOTechホログラフサイトがダイナゲートを捉え、空中にいるM4A1の照準は一匹のダイナゲートへ定められた。

M4A1の引き金が絞られる。撃針が雷管を叩き、ガンパウダーに火をつける。もたらされる燃烧ガスが弾丸を押し出すと共にボルトを後退させ、次弾を薬室に装填。それらの行程を毎秒十発前後のペースで行い、鉛の雨が放たれた。

戦術人形という“機械”による正確なガンコントロール。空中で

フルオート射撃しているにも関わらず、弾丸は無駄なくダイナゲートの群れへと飛び込んでゆく。

時間が止まった世界で、彼らだけが動いているかのように、弾丸の雨は空気を裂いて敵の群れへ飛翔する。

鉛の雨はダイナゲートのボディにめり込み、弾丸とそれが纏う衝撃をもって中の配線や基盤をぐちゃぐちゃにかき回して突き抜けていく。レールガンの銃身をいともたやすくへし折り、赤く光っていた（一部の人にとっては）愛らしいカメラレンズを叩き壊していった。

M4がジャンプして着地するごく短い間に、挟撃しようとしていた片方の敵の群れは全滅していた。M4は着地と同時に銃撃を一旦止め、セミオートにセレクターを切り替える。地に足ついた立射姿勢による堅実なダブルタップで二発ずつ叩き込み、次々とDine^{ヘイ}rate^{イア}を刺し殺す。セミオートによるダブルタップだが、速さは熟練のシューターやインストラクターに匹敵するか、それを超えていた。

残る一匹のダイナゲートが、先ほどのM4の真似をするように陳列棚へ飛び上り、そこからM4へと飛び掛かってくる。

難なく今までと同じように屠ろうと引き金を絞るが、カチカチと音を立てるだけだった。銃を傾け、ボルトキャリアを一瞥。後退したまま停止している。弾切れだった。

リロードよりも、飛び掛かってくるダイナゲートのミニレールガンが吠える方が速い。既にこちらを向いているレールガンの銃口を見てそう判断し、M4は回避に専念。

経験から狙ってから撃つまでのタイミングをあらかじめ把握していたので、かわせる確率は高かった。上半身と首を傾けると、レールガンの銃声とほぼ同時に耳元で風切り音。残像を描くように追従する黒髪の波に、小さな穴が空く。

「ふんっ!!」

そして乙女の髪を傷つけたなど言わんばかりに、黒髪の美少女は空中のダイナゲートへハイキック。強化外骨格に覆われた、タクティカルドールの膂力による少女の強烈な蹴り。金属同士の衝突音がガン

と鳴り響く。

ダイナゲートは思いつきり壁に叩きつけられた後、床に落下。蹴られた部分がへこみ、カメラレンズにはヒビが入っていた。

M4は左脚を戻し、空になったマガジンを自重で落下させる。チェストリグから新たなマガジンを取り出し、装填。親指でボルトキャッチを押し、薬室に一発目を送り込んだ。

そして瀕死のアリに一発。とどめを刺す。

銃声はまだ止んでいない。ダミードールもまたダイナゲートと交戦中だった。M4はダミーしぶんの援護へ向かうべく駆け出す。

○

「地下に向かうぜ」

『了解』

M4の交戦より少し前。M4達より早くクリアリングを終えていたAKとUZIは、1階の索敵を終え地下へと向かっていた。電力の供給を失いただのボロボロの階段となり果てたエスカレーターを降り、AKとUZIの二人、もとい五体の人形は地下へと降り立つ。

広い空間に等間隔にならぶ太く四角い柱。その間を所々埋めるように、陳列棚や冷蔵ショーケースだったものが並んでいる。昔は食品売り場だったようだ。

AKとUZIは銃を構え直し、いるであろう敵に備える。UZIは左右の手に銃をそれぞれ持ち、トゥーハンドスタイルに切り替えていた。

『コンタクトッ!』

M4の声が無線に流れる。

『ダイナゲートか。M4なら単体で処理できる。他は各自行動を続けてくれ』

冷静かつ、人形に信用を置いた指揮官の落ち着いた声が続いた。それを耳にしつつ、UZIは自分たちが置かれている状況の違和感に思わず疑問が口に出た。

「ねえ……ここ」電気通ってない” んじやなかった？」

「そう見えてた……いや見せてただけみてえだな」

地上階の照明やエスカレーターはとつくに機能してなかったにも拘わらず、地下は照明によって照らされ、その全貌を見せている。流石に施設の劣化もあり光らないライトもあるが、視界の確保に困るほどではない。

広すぎず狭すぎず、遮蔽物に恵まれ、おまけに灯りもついている。戦うにはもってこいの場所。UZIもAKも、戦闘中継を見ている指揮官も同じことを思ったその時、

「時代遅れのジャンク二挺だけとは、ずいぶん余裕だな。グリフィンの人形共」

「鉄血のボス……！」

「どこにいやがる……！」

シヨツピングモールの地下で反響する女性の声。人形越しに聞いたその声を、指揮官は知っていた。

『ハンターか』

指揮官は全体の状況を思い出す。G3と1911は3階のクリアリングを間もなく終える。M4は先ほど敵と交戦していたが、ダイナゲートの群れだ。M4の戦闘能力なら切り抜けられるし、増援が必要なのはここよりも地下だ。

『1911、G3。直ちに地下に向かいUZI達の援護』

『了解！』

『はい』

彼女たちにとっては頼もしい指示だが、援護が来るまで鉄血のハイエンドモデルを相手に戦術人形二人で持ちこたえなければならぬ。

『回避最優先だ。それでも撃つ時は制圧射撃か援護射撃。狙わなくていい』

『そのつもりよ』

「バラまくのはあたしも得意だぜ」

UZIとAKは互いに背中を預け、死角を作らないよう全方位を警戒する。遮蔽物が視界の邪魔だが、同時にこれは彼女たちの盾でもあ

る。

二丁拳銃と高い機動力を武器とするハンターにとって、遮蔽物の多い室内というのは最適なフィールドだ。位置を特定し追い詰めたように思えたが、同時に敵の”狩場”に誘い込まれていた。

(ハンターはST AR-15を人質に取られた時倒したことがある。しかし今回は真っ向からのガンファイト。最新の人形と比べてスペックは劣っていたとしても、こっちも経験を積んだ部隊だ。みんなが合流さえすれば勝てる戦いではあるが、それまでは……二人を信じるしかないな)

「ハンティング開始だっ!」

ハンターの声が出た直後、二種類の銃声がまくし立て合う。お互いに敵を確認したAKのダミーとハンターが同時に撃ち合ったのだ。

「くそ、かすった。UZ-I!」

「ええー!」

ダミーのダメージを確認しながら、AKはUZ-Iに制圧射撃を要請。二挺のサブガンがパラララと吠え、タイミングを読ませない不規則なフルオート射撃でハンターのいた場所をふさぐ。

『回り込ませるな、散開してAKも制圧射撃』

(攻撃する時にわざわざ喋るたあ……これ完全にナメとるね)

指示をしながら指揮官は敵の煽りに内心不快感を覚えていた。彼の煽り耐性はカスだ。

AKはUZ-Iと分かれ、回り込まれないように位置取りをして複数の方向をダミーと連携してカバーする。顔を出すようならすぐさま弾丸をブチ込む構えだ。

「店の中は……走るなっ!」

UZ-Iはそう言い放ちながら、ポーチから取り出した焼夷手榴弾のピンを引き抜き、投擲。直線に近い放物線を描き、ハンターが走り回っているルートの一部に落ちる。目的は移動の妨害だ。

(店でサーマイトぶちまけるのもイカンでしょ)

邪魔になるので指揮官は心の中でつぶやいた。

落ちてすぐ、テルミット反応により缶から放出された光のように眩

しい炎が噴出。投げられ床を転がっていた手榴弾は周囲に熱と光と煙をぶちまける。

「こざかしいことを……！」

狙い通りハンターの動きを妨害するのには成功したが、彼女の怒りにもまた火をつけた。ハイエンドモデルの膂力を持って床を蹴り、床をスライディングしながら遮蔽物を飛び出して二挺の銃を突き出す。今狙えるのはAKのダミードールだった。制圧射撃は所詮制圧射撃であり、勢いよくスライディングして飛び出してきたハンターに弾が当たる確率はそう高くない。

鉄血公造のハンドガンから放たれる複数の刺突攻撃。次世代の強力な弾丸が、金髪の少女の胸部と腹に吸い込まれるように突き刺さっていた。

「あーやりやがったチクショー！」

対応が一瞬遅かったAKのダミーは撃ち返すこともできず、無残に人工血液と部品を背中にできた射出口からぶちまけながらおおむけに倒れる。バイタルサインはかろうじて残ったが、戦闘は不可能だった。

「ダミーやられたー！」

『あと少し耐えて』

『G3たちがエスカレーターの前に来た。援護できるか』

「リロードッ！」

ハンターがスライディングで飛び込んだ柱へ二方向から制圧射撃を加えるべく、UZIは走りながらリロードを行う。

1911がやっていた要領で両手の銃を右手だけで保持。それぞれのグリップの下部にあるマガジンキャッチを人差し指の第二関節と親指で押しながら、空のマガジンを引き抜き放り捨てる。

指で挟んだ新たなマガジン二つをマグポーチから引き抜き、マグウエルにあてがう。半ばまでマガジンを挿入し、底を掌で叩いて確実に装填。

「準備できたー！ G3ッ！」

位置を変え終わると同時にリロードも完了。AKに合図しながら、

UZ Iはハンターの隠れている柱へ向けて拳銃弾を遠慮なくばらまく。

「ひっこめッ!!」

ほぼ同じタイミングでAKも制圧射撃を再開。リロードを終えたダミーも加わり、二挺のライフルと四挺のサブマシンガンが、敵を柱へ釘付けにした。

マイクロウージーの軽い銃声と、AK-47の重い銃声が間断なく轟く。味方とすれば頼もしいが、わずか数秒の盾だ。

攻撃が来ないそのわずかな隙に、1911とG3がエレベーターをドタドタと駆け降りる。

『G3、回り込んで横から撃て。1911、UZ IとAKの近くでスタンバイ。いつでもカバーできるように』

「ええ」

「はい」

柱の間を駆け、G3はハンターがくぎ付けになっている柱の側面へ回り込む。1911はUZ Iと同じカバーポイントへ移動。隣の柱には制圧射撃を続けるAKがいる。

だがやられっぱなしのハンターではない。UZ Iの弾が切れ、ダミーと攻撃を交代しようとする一瞬の隙を狙い、多少の被弾を覚悟の上で大きく姿を現す。腰を低くし、二挺拳銃を連射。

古い火器の銃声ばかりが轟いていた地下空間に、次世代弾薬と拳銃によるモダンな銃声が混じる。

「ああつ、ウソ……!」

被弾したのはUZ Iの本体だった。隠れようとしていたため胴体は無事だが、左腕と左脚に数発被弾。二の腕の真ん中を突き破り、人筋肉は著しく破損。左脚には太ももや膝などに数発銃創が生まれ、黒いニーツクスに人工血液が染みていく。こちらも筋肉やフレイムが損傷し、自力で歩くのは不可能になった。

姿勢を崩して敵の攻撃範囲へ倒れそうだったが、ダミーに自分を引っ張らせて柱の陰に倒れる。

『先にメインか……! UZ I撤退だ! ダミーに運ばせろ!』

「スモーク投げる！」

1911がスモークグレネードをハンターへ投擲。敵の視界を遮り撤退の援護。

「また手榴弾……！」

鬱陶しい煙に顔をしかめ、ハンターは乱射を続ける。応戦するように1911も煙に向かって45口径弾を放つ。二挺拳銃同士による牽制のし合い。

敵の視界が塞がれている内に、UZIは自身のダミードールに運ばれエスカレーターを上り戦線離脱。

回り込んだG3は遮蔽物から一瞬だけ顔を出して覗き込み、ハンターを確認。ポーチから榴弾を取り出すと、銃身下部に装着されているグレネードランチャーに装填。露出面を抑えるべく左肩にストックをあて、再び銃と共に顔を出す。

喰らえ。そう口だけを動かしながら、G3はランチャーの左側面にあるプッシュレバーを親指で押す。ぽんつという気の抜けた音と共に、榴弾がハンターめがけて飛翔。

だが爆発はG3の想定した位置では起きなかった。

「火に煙に爆発か、派手な戦いが好きだな」

1911の発煙手榴弾と違い、榴弾の煙はそれほど場には残らない。煙の向こうに薄く見えたのは、不敵に笑う狩人の銃口だった。

「うそでしょ……？」『ウツソだろお前……』

G3と戦闘中継を見ている指揮官の声が重なる。

寸での所でG3の存在に気づいたハンターは、片方の銃をG3へと向け迎撃態勢を取っていたのだ。G3の銃口や視線の向きから瞬時に弾道を予測。タイミングを合わせ、自分に被弾する前に爆発させた。無論ある程度の爆風は喰らったが、ハイエンドモデルの戦闘用口ポにとつてさほど脅威ではなかった。

『グレネード空中で撃ち落とすじゃがった』

「クソッ！」

左手で横からハンドガードを握り、その場でしゃがむ。しゃがんだG3のメインフレームの後ろから、ダミードールが立射で姿を現し銃

を構えた。

グレネードをミスを埋めるかのように二挺のG3が吠える。ガバメント、そして鉄血の最新ハンドガンの銃声が続いて、重い発砲音が演奏に加わった。

ハンターはG3から姿を隠しつつ、二挺拳銃をそれぞれG3とガバメントの方向へ向けて牽制射撃。今だ彼我を煙で遮られている分、1911の側に姿を晒す方が安全だった。

「あたしも前出ていいか!？」

『お前はそこを守れ。奴のルートを限定する』

今ハンターは壁際に追い込まれ、G3と1911からの攻撃を受けている。そこから逃れようと位置を変えれば、AKの攻撃範囲に入る。今のハンターにとつて有効な手段は、あえて敵側¹⁹¹¹に突っ込むこと。そう判断するのも遅くなかった。

素早く煙から現れて至近距離からの奇襲。百五十年以上前の骨董品^{アンティーク}で前線に出る愚かなM1911相手に負けるはずはない。敵の包囲網から逃れるついでに一体仕留めてやる。

ハンターは銃撃を止め、身を低くして駆け出し白い煙の中へと突っ込んだ。

「ッ!!」

実際、ハンドガンの戦術人形ごときで鉄血のハイエンドモデル一体を倒すことはほぼ不可能。それはハンターの慢心ではなくマシンスペック等の事実に基づいた冷静な判断だ。

煙を抜けた先でハンターは見た。次の得物と定めていた、骨董品を構えたブロンドを。しかしそれ以外の人形も視界に入っていた。

「攻撃……!」

透き通るような少女の声を、二挺のM4A1による近距離フルオート射撃が轟音をもって塗り潰した。

部隊と合流したM4A1による迎撃。指揮官の指示に従い、ここで待ち構えていた。ダイナゲートの奇襲によりダミードール一体は戦闘不能になったが、まだ彼女に戦う力は残っている。

わずかに体を前に逸らして反動に備え、ハンドガードを横から保持

するCクランプ。機動力のあるハンターを相手取るのに適した構えだ。おまけにダミードールと共にFCS^{火カ}処理を優先^中している。現状で彼女が出せる最高火力を、近距離かつ真正面からハンターへとぶつけていた。

リロードを終えた1911も、ついでと言わんばかりに攻撃に加わる。

2062年の廃墟の地下に、古き名銃二つの声が轟く。

静寂が訪れ、申し訳なさそうな金属音を立てて空薬莖が転がる。彼女たちの目の前にあるのは、かろうじて人型だったと判別できる、無数の弾痕を刻んだスクラップだった。

○

ダンデムローターによってもたらされる轟音が、その空間を包み込んでいる。細長い小さな部屋のような空間の壁には、十人の少女がいた。彼女たちは壁に備え付けられた椅子に座っており、今自分たちが乗っているものが仕事を終えるのをじっと待っていた。

『もうすぐ到着だ。降りる準備しておけ』

パイロットが無線で伝え、座席に座る彼女たちが装備しているヘッドセットに音声が届く。それを聞くと、彼女たちは同時にほつと息を吐いた。

「美味しいトコだけ持ってくとか言ってたけど、持ってくどころか手足持ってかれちやつたわ……」

出撃時の発言を思い出し、ヘリの座席に座るツインテールの少女は自嘲気味に笑った。人工血液の流れる戦術人形でも患部は人間と同じように止血され、包帯が巻かれている。UZIの負傷した腕は布を使って首から吊っている。人間と違う所があるとすれば、細菌などにさほど気を遣わなくていいことだろうか。

『いつも通りの任務かと思っただが、存外ギリギリな任務になってしまったな』

申し訳なさそうな声音で指揮官の声が無線を通じて彼女たちの耳

に届く。

「それがあたしらのいつも通りだろ」

AKはそう答えてふっと口元に笑みを浮かべた。

「……ええ」

窓の外の空を見ながら、M4はそう同調する。その表情に笑顔はないが、生への安堵は確かにあった。

「……とんでもない日常ね……」

天井を仰ぐUZIの口からは、大きなため息と共にそんな言葉が漏れていた。